

おおいた 法の海

第 52 号
発行所
浄土真宗本願寺派
大分教区基幹運動推進委員会
〒874-0920 別府市北浜3丁目6-36
本願寺別府別院内
TEL 0977-22-0146
FAX 0977-24-7831



あたたかい光に照らされて

すまんなあとよろこぶ

2歳になる我が子が「ありがとう」「ごめん
なさい」を言えるようになりました。

「ありがとう」の時はニコニコ表情で、「ごめん
なさい」の時はシクシク表情で言っています。私
はそのやり取りを見て「感謝」と「謝罪」の二言
を思いつきました。思えばその二言は、正反対な
意味の言葉なのに、共通の「謝」という同じ言葉
が使われています。早速辞書を引いてみたら「す
まんの心」と書いてありました。子どもながらに
人から親切を受けたら「すまんなあ、ありがとう」、
人に迷惑をかけたなら「すまんなあ、ごめんなさい」
と、どちらもまず「すまんなあ」と感じ、言葉に
発しているのだなあと学ばせていただきました。
親鸞聖人は、「ご恩報謝のお念仏とよろこばれま
した。」「恩徳讃」では、「如来大悲の恩徳は身を粉
にしても報すべし 師主知識の恩徳も骨をくだき
ても謝すべし」とあります。
如来のお救いに「すまんなあ、ありがとう」と
手を合わせていただく毎日です。

合掌

(豊後高田組興隆寺副住職 護城孝道)



某月某日、某寺にて。

A子 御院家さん、こんにちは。来年の団体参拝の申し込みに来ました。

住職 ありがとうございます。おかげさまで、これで定員一杯になりました。

A子 それにしても七百五十回忌とは、随分後まで法事をするものですね。

住職 一般のお家の人もいいんですよ。

A子 していいと言われても、そんな昔の祖先はわかりませんわ。

住職 そりゃそうですよね(笑)

A子 普通は五十回忌までですよ。

住職 一周忌・三回忌・七回忌・

十三回忌・十七回忌・二十五回

忌・三十三回忌・五十回忌・百

回忌・百五十回忌・二百回忌と

いう具合に、五十回忌以後も五

十年ごとに勤めることにはなっ

ているのですが、本人を直接知

る人がいなくなるので五十回忌

で終わりにすることが多いで

ね。

A子 石原裕次郎さんの二十三回忌がありましたね。

住職 宗派や地域によって、二十五回忌をしないで二十三回忌や二十七回忌や三十七回忌を勤めるようです。

A子 どうして飛び飛びに勤めるのでしょうか。

住職 おそらく、最初は毎年法事を勤めようとしたのでしようが、毎年お客を呼ぶのは大変だ

あるということですね。

住職 儒教の伝統の中で、亡くな

なって一年目を小祥、二年目を大祥と呼ばれていたのが、一周

忌と三回忌として仏教に取り入れられたようです。亡くなった

日が一回目の命日ですから、亡くなって一年目には二回目の命日

五回忌は何年目にお勤めしますか。

A子 七回忌は六年目、十三回忌は十二年目、二十五回忌は二十

四年目ですね。

住職 六・十一・二十四と倍数

になっていきます。おそらくは干支が半周りした六年目に七回忌

一回りした十二年目に十三回忌

二回りした二十四年目に二十五

回忌と、干支を節目と考えたので

しょう。

A子 なるほど。干支でしたか。

では十七回忌は。

住職 十七回忌は十六年目、三

十三回忌は三十二年目でこちら

も倍数になっています。調べて

もよくわからなかったのですが、

二の累乗である十六という数字

に何か特別な意味を見たのでし

ょう。

A子 四掛ける四だから、春夏

秋冬や東西南北など何とでも理

由付けができそうですね。

住職 三十三回忌の次は五十回

忌で、それ以後は五十年毎の大

きな節目にご法事を営むわけ

です。

来年の親鸞聖人七百五十回大

遠忌には、お互い健康に留意し

てお参りさせていただきますま

ペンペン草の境内地 ②6 節目のご法事



から節目の年だけ法事にして、それ以外の年は身内だけで祥月命日のお勤めをするようになっての

節目の年に年回法要

A子 節目の年ということ、年忌の数字にはちゃんと意味が

住職 七回忌・十三回忌・二十

三回忌・三十三回忌・五十回忌・

掲示伝道

町角伝道掲示板

【東国東組 正覚寺】



裏は山、前は田んぼを見渡す高台にある田舎のお寺です。人通りもまばらな山門前通りですが、掲示板を通して、少しでもご法義を味わってもらえれば、と思い、平成九年より、掲示伝道をしています。

文面は主に、仏書より引用していますが、その他、心に響く言葉などを短かく文にまとめ、わかりやすく、書いています。道を行き交う方々の目に止まり、一人でも、何かを感じてもらえれば、うれしいです。 合掌



親鸞聖人の御言葉を聞く

申津組 昭雲寺 松嶋 智 謙



『自然法爾章』

「消息第十四通

(末灯鈔第五通)に

「自然(じねん)」といふはもとよりしからしむるといふことばなり。弥陀(みだつ)の御(ご)ちかひの、もとより行者(ぎやう)のはからひにあらすして、南無(なむ)阿彌陀(あみだ)仏(ぶつ)とたのませたまひて迎(むか)へんと、はからはせたまひたるによりて、行者(ぎやう)のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然(じねん)とは申(まを)すぞときて候(まを)ふ。」

との宗祖(そうそ)八十六歳の時にしたためられた御言葉(ごごんげん)があります。この一通(いつづつ)は「自然法爾(じねんほうに)

ほうに)」の理(ことわり)をお伝え下さる

ものであり、他の宛先(あて)のある手紙(てがみ)と異(こと)なり、このご消息(ごしよき)には宛先(あて)がありません。特定の誰(たれ)かに宛(あ)てられたのではなく、全ての人々(ひとびと)に宛(あ)てられたものであります。宛先(あて)がないからこそ、全ての人々(ひとびと)にこれだけは伝えておきたいという宗祖(そうそ)の思いが窺(うかが)えます。又、このお手紙(てがみ)が宗祖(そうそ)の実子(じし)善鸞(ぜんらん)様(さま)義絶(ぎてつ)の件(くだり)の僅(わずか)二年(に)後(ご)であることも感慨(かいがい)深いものがあります。

宗祖の憂

人はどうしても自分(おれ)中心(ちゆうしん)で物事(ものごと)を考えます。お救(すく)いということを聞く場合(ばい)でも、「何をどうしたら救(すく)われるだろうか?」という視点(しつてん)で考えようとしています。

そして、この「何をどうしたら」の問いの答(こた)が、自分の頭(かぶ)で救(すく)いの理屈(ことわり)を理解(りかい)する必要があると

勝手に思(おも)うのです。宗祖(そうそ)は「こうした心(こころ)は自力(じりき)、即ちこれこそが疑(うたが)いの心(こころ)であると仰(おほ)せであります。」「何をどうすればよいか」を阿彌陀(あみだ)様に聞(き)くと言(い)うことは、逆に言(い)えば「何かをしなければ」阿彌陀(あみだ)様に救(すく)われないと「我(われ)に任せよ 必ず救(すく)う」との誓(ちか)いの喚(こゑ)び声を疑(うたが)っているのと同じです。

自力と他力

宗祖(そうそ)は、先述(せんじゆ)のお手紙(てがみ)の中で自力(じりき)を「行者(ぎやう)のはからひ」他力(たうりき)を「しからしむる」と仰(おほ)せであります。お念仏(ねんぶつ)申(まを)すことも阿彌陀(あみだ)様に帰依(きい)することも「しからしむる(そのようにさせる)」という他力(たうりき)(阿彌陀(あみだ)様の本願力(ほんがんりき))のおはからいであるということ

信心とお念仏

信心(しんしん)といっても私が努力(にうりく)して阿彌陀(あみだ)様(さま)を信(まを)じるのではなく、阿彌陀(あみだ)様の「我(われ)に任せよ 必ず救(すく)う」との誓(ちか)いの喚(こゑ)び声(こゑ)のまま

に「どうぞお救(すく)いなさいませ」と聞(き)き承(うけたま)わけるばかりなのであります。その上(うへ)では、阿彌陀(あみだ)様に帰依(きい)する心(こころ)も阿彌陀(あみだ)様(さま)からの賜(たま)りものと聞(き)くのです。

お念仏(ねんぶつ)も同じ(おな)じです。私も、そして私の口(くち)も、仏様(ぶつさま)になるような善行(ぜんぎやう)の一欠片(ひとかけら)も持(も)つこと適(かな)わぬのであります。そんな私の口(くち)に掛(か)かる南無(なむ)阿彌陀(あみだ)仏(ぶつ)のお念(ねん)仏(ぶつ)は私の手柄(てがら)ではありません。「我(われ)に任せよ 必ず救(すく)う」の喚(こゑ)び声(こゑ)のままのお救(すく)いの中に撞(あた)められてからこそお念仏(ねんぶつ)申(まを)す身を賜(たま)るのであり、お念仏(ねんぶつ)は「私の口に現(あら)われる仏(ぶつ)となる」と誓(ちか)われた阿彌陀(あみだ)様(さま)のお救(すく)いのお姿(すがた)そのものなのです。

自然法爾

お念仏(ねんぶつ)申(まを)す人生(じんせい)は、阿彌陀(あみだ)様(さま)の喚(こゑ)び声(こゑ)を聞(き)き承(うけたま)わ、何時(いつ)いかなる時(とき)にも私(わたし)の中に至(いた)り届(とど)いてくださっている阿彌陀(あみだ)様(さま)とお遇(あ)いしていく人生(じんせい)であり、阿彌陀(あみだ)様(さま)のお救(すく)いのおはたらきの中に生(な)かさせていただく人生(じんせい)です。

私が幼子(こども)であることも、病(やま)を患(う)い身を伏(ふ)せていようと、老(おい)いて阿彌陀(あみだ)様(さま)のことさえ忘れてしまつほどの身(み)になり果(な)つてたとしても、阿彌陀(あみだ)様(さま)は決して私(わたし)をお捨て(すて)にならず、「我(われ)に任せよ

必ず救(すく)う」の喚(こゑ)び声(こゑ)のままに私のいのちに入り満(み)ちてくださり、お浄土(じやうど)へ迎(むか)えとつてくださいます。自然法爾(じねんほうに)とは、阿彌陀(あみだ)様(さま)のお救(すく)いの中に包(か)まれて、人生(じんせい)を精(せい)一杯(いっぱい)に生(な)かさせていただく事(こと)です。そこにはたとえ自分(おれ)が努力(にうりく)をしたこと

さえも「阿彌陀(あみだ)様(さま)の御苦勞(ごくろう)の中(なか)でありました」と味(あじ)わつていける、孤独(こどく)ではない「おのずからしからしむる」ぬくもりの中の人生(じんせい)が既(すで)に開(ひ)かれて



親鸞聖人 (安城の御影)



法 話

『よび声』

珍珠組 光林寺住職 帆足一洋



私は、このたび所属する光林寺の住職の継職について住職より突然に話を聞かされたとき、不安と心配は大変なものでした。昨年の春、100日間慣れない寮に入り、本願寺の住職課程に行きました。そこでは、同じ名字の方がいないので私は「帆足さん」と呼ばれていました。しかし地元では、そういう訳にはいきません。なぜなら一地域が全部帆足姓という所もありますし、ご門徒内でも帆足という同じ姓の方がたくさんいるので、名前で呼び合い、さらにそれぞれ

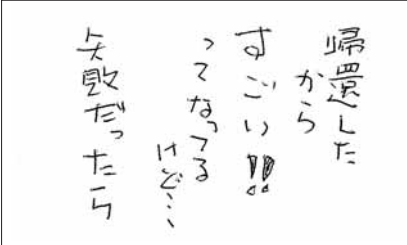
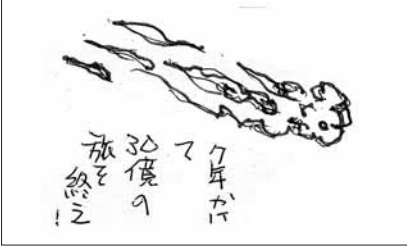
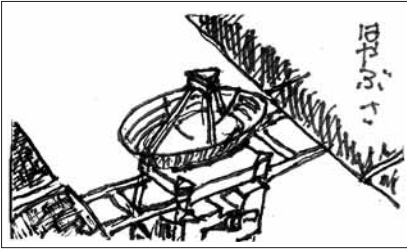
れが早く自分を知ってもらおう、相手を知らうという姿勢が強くなるようにです。私は「若さん」や「若」と呼ばれ、この呼び名が気に入っています。保育園の子どもさんから、「若さん」と呼ばれると、自然と笑みが出ます。また児童養護施設では、様々な理由により、子どもさんをお預かりし共に生活していますが、入園当初は、溶け込むのに時間がかかるように思いますが、先生や子ども達も自分を知ってもらおう、相手を知らうというはたらきが生じ、いつの間に

か家族のようになります。このお陰で人との距離が近く、親しくなるという思いが強いお寺のようです。そんなお寺から京都に勉強に行っていた私は、はじめてホームシックになり、五月の連休に帰省しました。すると皆さんから「若さん」「若」と迎えて頂き、これでまた二ヶ月頑張れるぞと、意気揚々と新幹線に乗り、京都駅に下りた瞬間、寂しさで不安が心を覆ってしまいました。人口二万八千人の町から、京都駅だけでも五万人はいるのではないかとという人の多さに圧倒され、知らない人ばかり、誰も声をかけてくれない孤独さに、すっかり気持ちがいまい、これまで私の意気込みなど飛んで行ってしまいました。とほとほと寮に戻る

と、「おかえり」「お疲れ様」と同僚の声に癒され、就寝勤務の時間になりますと、両隣の部屋からお念仏が聞こえてきたのです。これまでになくお念仏が私の心に、温かく響いてきたのでした。ご和讃に、「十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなはし 撰取してすてざれば 阿弥陀となつたてまつる」とあります。阿弥陀様は、この私を決して一人にせず、必ず撰め取って捨てない。この私がどんなに目を背け、逃げようともどこまでも追いかけて、必ず救うことがまちがいないと、確信をなされたから「南無阿弥陀仏」の声となるときでも誰にでも私がいるよ」とこの私によびかけています。

よぶといつても、遠くからよんでいるような気楽なものではなく、如来様のよぶは「喚」という字です。出産中のお母さんと今まさに産まれようとしている赤ちゃんを取り上げようとしている助産師さんの姿を表しています。ということは遠くからでは間に合わない、私のすぐ側で、声をかけ、手をかけ気づかせようと必死に喚びかけているのです。この帆足一洋よりも私を知り抜いて、見抜いて下さり、私の口からは何一つ真実の言葉は出ませんが、南無阿弥陀仏という真実の言葉が出て下さるので、さらに隣からも、周りの方々から、「南無阿弥陀仏」を聞か

あしがき



せて頂いているのです。お寺にて、人と人が親しくなるのは、「帆足さん」という名字のお陰と思っていました。阿弥陀如来様が十方の衆生を救うというはたらきが、心寂しい、傷つきやすい一人一人を優しく温かく抱いて下さるからでした。その阿弥陀様に出会い、違い続けている喜びを共有させて頂いているからこそだったのです。

あとがき

「はやぶさ」が六月十三日夜帰還（カプセル分離後に燃え尽きた）と十四日の朝刊一面で知った。「なんだ、なんだ。まだ生きていたんだ」と記憶の彼方にあつた。「はやぶさ」が一日頭の中にあつた。すべて任務をなし終えて燃え尽き流れ星となった最新期の姿は、なんと日本人にぴたりなことか。四基中、三基のエンジンが故障をしたぞつだが、その危機的状況を研究者の用心深さが救った。「一基をつなぐ予備回路を仕込んでいたのが功を奏したぞつだ。いろんな事に関わる中で、どれほどの用心深さをもってきたぞつだ。」まあ、いいか。で済ませたことはないのか。「はやぶさ」の快拳から振り返ったことです。